様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８０８８９

研究課題名（和文）2世代間の母子関係が子どもの食行動の選択に及ぼす影響

研究課題名（英文）The influence of mother-child relationship between two generations on the choice of child's eating behaviors

研究代表者
小野寺　敦子（ONODERA, Atsuko）

目白大学・人間学部・教授

研究者番号：４０３２０７６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、同一家族内の母子の食行動と母子関係の関連性を日本人の2つの世代間（大学生とその母親および幼児をもつ中年女性とその実母）そして韓国人の大学生とその母親という世代間によって検討した。母親の食意識・食行動と子どもの食意識・食行動は非常に類似しており、母親世代から子ども世代へと食意識と食行動は伝承されていくことが明らかになった。また家族で一緒に健康的な食事をとっている日本人および韓国人大学生は、母親を信頼し良好な関係性を維持していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, the relationship between maternal and child's eating behaviors and mother-child relationships in the same family was examined between two Japanese generations (university students and their mothers and middle-aged women with child who attended either nursery school or kindergarten and their own mothers) and Korean college students and their mothers.The strong similarities was clarified between mother's eating consciousness and behaviors and child's ones. This results implied that eating consciousness and behaviors were transferred from mother generation to child generation. Also, Japanese college students and Korean students who ate healthy foods together with their families tended to trust their mothers and maintained good relationships.

研究分野：発達心理学

キーワード：食行動　母子関係　日韓比較調査　世代間比較

１．研究開始当初の背景

毎日、私たちがとる「食事」は、栄養補給という機能だけではなく、家族がコミュニケーションをとる場という重要な機能も担っていると考えられる。食事中に、母親が子どもの話に耳を傾けお互いが楽しく会話をすることで子どもの心の中に心理的安定が育まれていく。しかし近年の日本人の日々の食生活では「個食」（同じ家族であっても各自が異なる内容の食事をする）「孤食」（家族が別々に１人で食事をする）「小食」（ダイエットなど）「粉食」（パンなどの粉を主体としたやわらかな食事）「欠食」（朝食を食べない）といった問題が指摘されており、次世代を担う子どもたちの健全な心身の発達への悪影響が懸念されている。現代の家族の食行動が乱れてきた原因として、働く母親の増加、父親の長時間労働、子どもの塾通い、といった家族の生活形態の様々な変化が関連していると推測される。たとえば仕事をもつ母親は多忙であり食事を作る十分な時間がもてないために、夕飯にコンビニエンスストアーの弁当や市販の惣菜を買ってきて食卓に出すことが多くなってしまう。するとお腹をすかせた子どもは１人でテレビを見ながら黙々とその弁当を食べ家族での会話はほとんどない。徐々に家族の中に「個食」「孤食」という食行動が当たり前になり、家族で一緒に食卓を囲む「共食」の機会は減少すると考えられる。すなわち近年の家族を取り巻く生活形態の変化が、本来、「食事」がもつ大切な機能（家族内のコミュニケーションをとる場）を変化させ、それが親子の関係性にも影響を与えていくと考え本研究を着想するに至った。

また母親が日々子どもに食べさせる食事内容は、子どもに伝承されていくと考えられる。野菜料理が夕飯によく食卓に並ぶ家庭で育てば、自分が親になった時にも野菜料理を作ろうとすると考えるはずである。つまり食行動や食事に対する意識は、親から子へと世代間で伝承されていくと考えられる。そこで本研究では、同一の家族内の親と子という２世代間に注目し、両者の食行動や食意意識の比較検討も行った。

２．研究の目的

本研究では、同一の家庭内における母親の食行動や食意識が子どもの食行動選択とどのように関連しているのかを明らかにし、さらに母子関係と食行動・食意識との関連を明らかにすることを目的とした。この目的を検討していくために、下記の３つの異なる世代間の研究を実施した。

（研究１）日本の大学生と母親の２世代
（研究２）幼児をもつ中年女性と実母の２世代
（研究３）韓国の大学生と母親という異なる文化での２世代。隣国でありながら日本とは異なる食文化をもつ韓国の大学生とその母親という２世代を研究対象者とすることで、異なる文化圏で上述の関連性を検証すると共に日本人データとを比較検討した。

３．研究の方法

（研究１）日本の大学生と母親の食行動・食意識および母子関係に関する研究

調査・分析対象者：都内の２つの私立大学に依頼し大学生 688 名に対し大学生用質問紙、母親用質問紙、切手を貼った返信用封筒（母親用）を A4 版の封筒に入れ配布した（両方の質問紙に同じ番号を記入し、返信後同一の親子データであることを照合できるようにした）。その結果、同一の家庭内にある母親と大学生のペアー254 組から回答が得られた。また本研究では現在の家族における日々の食生活と親子関係について検討することを目的としていたため、親元から離れて生活している一人暮らしの大学生（31 名）とその母親のデータは分析から除き、223 組を分析対象者とした（息子と母親 58 組・娘と母親 165 組）。大学生の平均年齢は 20.22 歳（*SD* =1.45）、母親の平均年齢は 50.80 歳（*SD* = 4.28）であった。分析内容：① 大学生が評価する母親との関係について 10 項目設定した②食行動と食意識項目：河野・渋谷・小野寺・西川（2012）の 12 項目からなる「食ライフスタイル尺度」から 8 項目、家族との食事に関する 3 項目、野菜や甘いものを食べる頻度を尋ねた 7 項目、合計 18 項目を大学生と母親に対し設定した。 ③母親の養育態度 14 項目：統制的養育態度 7 項目と自由・放任主義的養育態度 7 項目を設定した。①から③に対し 4 件法で回答を求めた。

（研究２）幼児をもつ中年女性と実母の食行動と食意識および母子関係に関する研究

調査・分析対象者：幼稚園や保育園に子どもを通園させている母親に質問紙を配布し、記入後に返送してもらった。その際、実母に対する質問紙の郵送の可否を問い、可能な場合には実母の住所と氏名を記載してもらい、その後、実母に質問紙を発送し、記入後に返送してもらった。以上の手順を経て首都圏に在住し幼稚園と保育園に通う子どもをもつ母親 360 人とその実母 71 人から回答が得られた。娘の平均年齢：37.81 歳（*SD*=4.46）実母の平均年齢：65.63 歳（*SD*=6.44）であった。分析内容：（研究 1）で使用した食行動と食意識項目 18 項目に加え「伝えて行きたい我が家の味がある」「おせち料理や赤飯などの伝統食を作る」などの項目も加えて分析した。さらに母親との関係性を尋ねた 10 項目、子どもへの養育態度の 14 項目について尋ね、全て各 4 件法で回答を求めた。

（研究３）韓国の大学生とその母親の食行動・食意識と母子関係に関する研究

調査・分析対象者：韓国ソウルにある 4 年制大学に通学している大学生とその母親の両方から回答が得られた 303 組（母親と息子 104 組、母親と娘 199 組）を分析対象者とした。韓国人学生の平均年齢は 23.9 歳 (*SD*=2.60)、母親の平均年齢は 52.8 歳 (*SD*=4.66)であった。分析内容：日本の大学生とその母親に対して実施したアンケート調査と同じ内容を韓国語に翻訳し使用した。

（研究 4）質的研究：「写真からみた家族の食行動」同一の家庭内に生活している大学生とその母親という 2 世代がどのような食事を日々とっているかを具体的な形で知るために、両者に 3 食分の写真を 3 日間とってもらうことを依頼した。

４．研究成果

（研究 1）日本の大学生と母親の食行動・食意識および母子関係に関する研究

①大学生の子どもからみた母親との関係性を尋ねた 10 項目について因子分析（主因子法・promax 回転）を実施し 2 因子が得られた。第 1 因子では「母親のことをうっとうしく思う」「母親と私はわかり合えない部分がある」などの項目で因子負荷量が高かったため「母親との対立」因子と命名した（α＝.87）。第 2 因子では「何か重要な決定をする時には母親に意見を求める」「心配事があると母親にまず相談する」などの項目で因子負荷量が高かったため「母親への信頼」因子と命名した（α＝.84）。

②母親が子どもにとってきた養育態度を尋ねた 14 項目について因子分析（主因子法・promax 回転)を実施し 2 因子が抽出された。第 1 因子は「子どものわがままを聞き入れてきた」「子どもがほしがる物があれば買ってあげてきた」などの項目で因子負荷量が高かったため「自由放任」因子と命名した。第 2 因子では「あれはだめ・これはいけないと禁止してきた」「親は怖いと子どもに思わせるようにしてきた」などの項目で負荷量が高かったので「統制」因子と命名した。信頼性係数（α係数）は「自由放任」「統制」ともにα＝.72 であった。

③「食行動と食意識」18 項目の因子分析の因子分析（主因子法・promax 回転）を行い 5 因子を抽出した(Table 1)。第 1 因子は「毎日の食事は栄養のバランスがとれている」等の 3 項目で因子負荷量が高く「健康的食事」因子と命名した。第 2 因子は「得意な料理がある」等の 4 項目で因子負荷量が高く「料理関心」因子とした。第 3 因子は「コンビニ等でお弁当やおにぎりを買う」等の 4 項目で因子負荷量が高く「コンビニエンス」因子、また第 4 因子は「夕食は家族で一緒にする」等の 3 項目で因子負荷量が高く「家族と食事」因子とした。そして第 5 因子は「スナック菓子を食べる」「食事に惣菜を買ってくる」等の 4 項目で因子負荷量が高く「菓子と市販惣菜」因子とした。α係数は第 1 因子α＝.84 第 2 因子α＝.73 第 3 因子α＝.74 第 4 因子α＝.75 第 5 因子α＝.62 であった。5 つの下位尺度得点の男女差はみられなかった。

Table 1 *「食行動と食意識」尺度の因子分析結果（主因子法-Promax 回転後）*

項　目	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子「健康的食事」（α＝.81）					
毎日の食事は栄養のバランスがとれている	**.94**	-.00	.06	.02	-.01
健康的な食生活をしている	**.88**	-.01	.05	.00	-.01
毎日,野菜を食べている	**.63**	.04	-.08	.00	.04
第2因子「料理関心」（α＝.73）					
料理をすることは楽しい	.02	**.82**	-.03	.00	-.03
得意な料理がある	-.03	**.74**	-.06	-.05	-.04
親から教わった料理を作る	-.03	**.63**	.10	.11	.05
料理本や料理番組を見て料理を作る	.07	**.59**	-.00	-.07	.12
第3因子「コンビニエンス」（α＝.74）					
ファーストフードを利用している	-.06	-.04	**.79**	.07	.01
外で食事をする	-.01	.09	**.68**	-.08	-.03
コンビニ等でお弁当やおにぎりを買う	-.04	-.07	**.62**	-.08	.08
すしやピザなどのデリバリー（出前）を頼む	.11	.04	**.58**	.08	-.04
第4因子「家族と食事」（α＝.75）					
夕食は家族で一緒にする（していた）	.08	-.07	-.11	**.72**	.10
家族がいても１人1人別々に食事をする(逆転)	.01	.04	.04	**-.69**	.04
家族で食事中,会話をする	-.03	.10	.19	**.69**	-.05
第5因子「菓子と市販惣菜」（α＝62）					
スナック菓子を食べる	-.18	.08	-.02	.09	**.58**
ケーキや和菓子などの甘いものを食べる	.08	.14	-.10	.01	**.57**
食事に冷凍食品を使う	.05	-.07	.08	-.09	**.51**
食事に惣菜を買ってくる	.04	-.09	.09	-.02	**.50**
因子間相関　第1因子	－	.39	-.48	.50	-.33
第2因子		－	-.28	.40	-.25
第3因子			－	-.28	.57
第4因子				－	-.30
第5因子					－

④大学生と母親の「食行動と食意識」がどのように関連しているかを相関係数を求めて検討した。その結果、大学生と母親の全ての下位尺度得点間において有意な正の相関係数が得られた。大学生の「健康的食事」得点が高いと母親の「健康的食事」得点も高く、大学生の「家族と食事」得点が高いと母親の「家族と食事」得点も高い傾向がみられた。これは大学生自身が野菜を食べバランスの良い健康的食生活を送っていると考えている場合、母親もそうした食生活を送っていると考える傾向があった。その一方でコンビニをよく利用する大学生の母親もまたコンビニを多用していることが示された。この結果から大学生と母親という 2 世代間の「食行動と食意識」は 5 側面全てにおいて関連していることが示された。

⑤母親への「信頼」・「対立」と「食行動と食意識」および養育態度との関連性を検討した。その結果「大学生家族で食事」と「母親家族と食事」は、「母親への信頼」との間に有意な正の相関係数が、「母親との対立」との間には負の有意な相関係数が得られた。また「大学生健康的食事」と「母親への信頼」との間にも有意な正の相関係数が得られた。この結果は、家族で一緒に

会話をしながら食事をする家庭では、子どもは母親への信頼感を高め、逆の場合は母親へ対立感情を強くいだく傾向があることを示している。さらに「母親との対立」と「統制」との間には有意な正の相関係数が得られており、母親に否定的な感情を強く抱く大学生の母親は、厳格で統制的な養育態度をとる傾向がみられた。一方、自由で放任主義な養育態度をとる母親は、コンビニやファーストフードの利用度が高く、菓子や市販惣菜を多く食べ、家族と一緒に食事をすることが少ないという傾向が見られた。

（研究 2）幼児をもつ中年女性と実母の食行動と食意識および母子関係に関する研究

①幼児を持つ母親とその実母の食行動・食意識項目を因子分析した結果、次の 4 因子が得られた。それらを第 1 因子「料理好き」因子、第 2 因子「健康的食事」因子、第 3 因子「伝統的食事」因子、第 4 因子「コンビニエントな食事」因子と命名した（母親のα係数は 63 から 90、娘は 65～90 であった）。娘の「健康的食事」因子では「和食（煮物など）を作る」の因子負荷量が高く、娘世代では和食を作ることを健康的ととらえる傾向がみられた（本項目は実母では伝統的食事因子の中で因子負荷量が高かった）。また母親世代では「外食をする」がいずれの因子においても高い負荷量を示さなかった。

②幼児をもつ中年女性とその母親の食意識食行動の関連性を 8 因子間の相関係数を算出し検討した。この結果「母料理好き」と「娘料理好き」「母健康的食事」と「娘健康的食事」「母伝統食事」と「娘伝統食事」「母コンビニ」と「娘コンビニ」において有意な正の相関が認められた。これは母親がコンビニやファーストフードを使う頻度が高いと娘もその傾向が高く、健康的食事を心がけている母親の娘も自分の料理が健康的であると評価する傾向があることが示された。すなわち食意識や食行動は母親から娘へと世代間で伝承されている可能性が示唆された。

③母親と娘がとる養育態度の関連をみるために養育態度の 14 項目に因子分析（主因子法・Promax 回転）を母娘別に行い、両者共に 2 因子が抽出された。第 1 因子は「子どもの言い訳を認めない」などの項目で因子負荷量が高く「統制」因子と命名した。第 2 因子は「子どもが嫌がることは無理にさせない」などの項目で因子負荷量が高く「自由放任」因子と命名した。次に養育態度の類似性を検討するために両者の相関係数を求めた。その結果、実母が厳しく統制的な態度で子育てをしてきた場合、その娘も我が子に厳しく接していることが示された。その一方で母親が娘を甘やかし放任主義的な態度で育ててきた場合、その娘もまた子どもに同じような養育態度をとっていることが示された。

④「統制」得点と「自由放任」得点を用いて k-means 法によるクラスタ分析を 360 名の娘データに対して行い 4 クラスタを得られた。両得点が共に高い群をアンビバレント群(111 名)、「統制」が高く「自由放任」が低い群を統制群（77 名）、「統制」が低く「自由放任」が高い群を放任群（64 名）、両得点が共に低い群をバランス群（104 名）とした。これら 4 つの養育態度によって娘の食行動や食意識がどのように異なっているかを分散分析によって検討した。その結果、「娘コンビニ」得点において 4 群間で有意差が認められた（F 値＝6.45***）。養育態度がアンビバレント群（厳しいかと思えば甘やかす一貫性のない態度をとる幼児をもつ母親）はファーストフードや出来合いの料理を子どもに食べさせる傾向があった。

（研究 3）韓国の大学生と母親の食行動・食意識と母子関係に関する研究：日韓の比較の観点から。

①韓国人の大学生とその母親の「食行動と食意識」尺度 18 項目を因子分析した結果、「コンビニエンス」因子、「健康的食事」因子、「菓子と市販惣菜」因子、「家族と食事」因子、「料理関心」因子という日本人と同じ 5 因子が抽出された。

②これら 5 つの下位尺度得点を大学生と母親で別々に算出して相関係数を求めたところ、「コンビニエンス」得点と「健康的食事」得点「家族と食事」得点は母親と子ども間で有意な正の関連性が示された。つまり韓国人の母親の中で簡易な食事をしている母親ほど、大学生もその傾向が強かった。また母親が自分の食事を健康的だと高く評価していると子どもも健康的であると評価していた。しかし日本人の大学生とは異なり、韓国では「料理関心」と「菓子と市販惣菜」尺度では母親と子どもの間に有意な関連性は認められなかった。

③これらの韓国人大学生の食行動と食意識に関する下位尺度と「母親への信頼」および「母親との対立」との関連性を検討した。その結果、日韓ともに「母親への信頼」と「家族と食事」「健康的食事」との間に有意な正の相関が認められた。その一方、「母親との対立」と「家族と食事」との間には負の有意な相関が、「菓子と市販惣菜」との間にはやや弱い正の相関が両国ともに認められた。このことから家族で一緒に健康的な食事をとっている大学生は母親に対して信頼感をいだいていたが、家族で食事を

とることが少ない大学生は母親に対立感情を強く抱く傾向があると推察された。
④これら5つの下位尺度得点を日韓大学生で比較検討したところ、韓国人大学生の方が日本人大学生よりも有意に平均値が高かったのは、「コンビニエンス」得点と「健康的食事」得点であった。韓国人大学生は日本人大学生よりもコンビニエンスストアーなどの簡易な食事をとる傾向が強かった。一方、日本人の方が有意に高かったのは「菓子や市販の惣菜」得点と「家族で食事」得点であった。
（研究4）質的研究：「写真からみた家族の食行動」同一の家庭内に生活している大学生とその母親という25組の食事場面写真を分析した。どのような食品や料理を誰と食べたかを記入してもらい、分析した。その結果、かぼちゃの煮つけ・煮魚・白米・味噌汁という和食の夕食をとった親子は自分の夕食評価に100点をつけていた。また、朝食にインスタントお汁粉・フランスパン・目玉焼きといった一風変わった朝食をとっている親子もいた。
　本研究では、同一家族内の母子の食行動と母子関係の関連性を2つの世代研究によって検討した。日本人大学生とその母親という世代研究では「料理関心」「健康的食事」「コンビニエンス」「家族と食事」「菓子と市販惣菜」の5因子が導かれ、全ての相対する下位尺度間で有意な関連性が認められた。次の幼児をもつ母親とその実母という世代研究においても「料理好き」「健康的食事」「伝統的食事」「コンビニエントな食事」の4因子が導かれ、全ての相対する下位尺度間で有意な関連性が認められた。以上のことから日本人の母親と子どもの食行動と食意識は類似しており、親世代から子ども世代へと食事意識・食行動は伝承されていくことを確認できた。また食文化の異なる韓国でも「健康的食事」「家族と食事」および「コンビニエンス」という食行動は母親と子ども間で類似していた。さらに母子関係と食行動・食意識との関連を検討した結果、家族で一緒に健康的な食事をとっている日本人および韓国人大学生は、母親を信頼し良好な関係性を維持していることが明らかになった。文化が異なっていても家族との共食、健康的食事は母親への信頼感を築く上で重要であることが示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　5　件）
①**Kawano R**.、& **Onodera A.** Comparison of opinions on support of elderly parents between Japanese and Korean university students. The 31st International Congress of Psychology、2016年7月28日、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）
②**Onodera A.**、& **Kawano R**. The comparative study on the dietary life style between university students and their mothers in Japan and Korea. The 31st International Congress of Psychology、2016年7月27日、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）
③**小野寺敦子・河野理恵**　母娘2世代間における意識の検討（1）－食ライフスタイルおよび養育態度について、日本心理学会第79回大会、2015年9月23日、名古屋大学（愛知県名古屋市）
④**河野理恵・小野寺敦子**　母娘2世代間における意識の検討（2）－親の介護および老親扶養意識について、日本心理学会第79回大会、2015年9月23日、名古屋大学（愛知県名古屋市）
⑤**小野寺敦子・河野理恵**　大学生の食ライフスタイルと親子関係、日本発達心理学会第26回大会、2015年 3月20日、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）

６．研究組織
(1)研究代表者
　小野寺　敦子（ONODERA　Atsuko）
　目白大学・人間学部・教授
研究者番号：40320767

(2)研究分担者
　河野　理恵　（KAWANO　Rie）
　目白大学・人間学部・准教授
研究者番号： 40383327

(3)連携研究者
　　（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者：
Seung-Min Lee、Ph.D.
Assistant Professor and Head、Dept. of Food & Nutrition、
College of Human Ecology、Yonsei University.